広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代ギリシア語の否定接頭辞 #-について
Author(s)	浮田, 三郎
Citation	ニダバ , 10 : 33 - 34
Issue Date	1981-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046385
Right	
Relation	

研究発表要旨

現代ギリシア語の否定接頭辞 ἀ- について

浮　田　三　郎

現代ギリシア語に於ける否定表現には，二つの否定詞 δέ(ν) と μή(ν) の用法に関する問題，否定詞と法の問題，否定接頭辞の語形成の問題等の幾つかの興味ある問題を提起することができる。本発表では，否定接頭辞の幾つかの特徴について，現代ギリシア語の ἀ-，ἀν-，ἀνα- に関して，古代ギリシア語にもある程度遡りながら，幾つかの面から考察を試みた。

さて，否定接頭辞とは，ある単語に付いてそれのもっていた明確な概念を変え，その概念とは矛盾した明確な概念を形成することの出来る接頭辞のことを，否定接頭辞と呼ぶことにする。この場合，二つの単語は，原則的には，一対の矛盾辞項であるが，しばしば反対辞項あるいは対立語になり得る。

ここで，数理統計的に考察する際には，基本的には，J. T. Pring の The Oxford Dictionary of Modern Greek に掲載されている単語群を当面の母語群と考えて，調査整理した。

第一に，この代表的な否定接頭辞 ἀ-，ἀν-，ἀνα- は，どの様な語に付き得るのか。まず，ἀ-，ἀν- に関しては，多くの単語に付いて，その矛盾辞項を形成している事が解る。ἀ- と ἀν- の違いに関しては，原則的には，ἀ- は語頭子音の単語に付き，ἀν- は語頭母音の単語に付くのであるが，若干の問題もある。即ち，幾つかの例の中には，母音で始まる単語に ἀ- が付いている場合がある。これは，当面の考察例では，その全てが古代ギリシア語にその源を発しており，その語頭母音が気息の場合か，その語頭母音の前に古くはＦ（ディガンマ）が存在する場合かの語形成に於いて，見られると言えるが，逆に ἀρμοστός 対 ἀνάρμοστος の様な，この法則では解明されない例も存在した。

又，ἀ-(ἀ-) と ἰ-(ἰ-) で始まる単語の前では，しかしながら，否定接頭辞 ἀ- の立つ例が見られなかったのは，コイネー時代から現代ギリシア語にかけての母音間の融合の傾向と考え合せれば，当然のことであろう。

語頭子音の単語には，必ず否定接頭辞 ἀ- が付けられる。

なお，この語形成を式に示せば，

$$f(x) = W(X) \leftrightarrow f(\text{neg. pref.} + x) = W(\text{neg. pref.} + X')$$

$$W(X)^{y} \quad \text{vs} \quad W(\text{neg. pref.} + X')^{y'}$$

（x は概念要素，y は品詞）

などとなり，単語W(X) は，形成された語W(neg. pref. + X′) と明確な対立を示す。この場合 y を名

詞，形容詞，副詞，動詞の四品詞で考えれば，W(X)^{y}対W(neg. pref + X′)$^{y'}$の組み合せは16通りできるが，実際には，実現しない組み合せもあり，y′=形容詞の場合が圧倒的に多く，動詞の場合は，非常に少ない。

ἀνα- に関して，Pringは，これを否定接頭辞としては挙げていないが，W(ἀνα + X′)は，元々W(X)の矛盾辞項W(ἀ + X′) に更にἀν- が付加されて形成された，W(X) の矛盾辞項であり，W(ἀ+X′) とは矛盾辞項を形成していない事が解る。従って，ἀνα- は，元の否定接頭辞 ἀ- の価値が弱まったのを補強する為に，更に ἀν- が付加されて出来たものと解する事が出来る。

ところで，ここで抽出した単語について，いつ頃から使用されだしたかを調べ，歴史的に考察すると，ἀ-，ἀν- は，圧倒的に古代から使用されている単語が多いが，ἀνα- の場合は，現代ギリシャ語の民衆語だけにその例が見られる。又，時代的には，ἀ-，ἀν- の語形成率が中世に於いて，極端に落ちているのは，文学活動の低迷していた歴史的背景を物語っているのであろう。

最後に，これらのW(neg. pref + X′)$^{y'}$なる単語を語尾の面から分類してみると，y′=形容詞の場合が圧倒的であり，全体の78%（副詞3%をこれに加えると81%）を占めている。この中で，語尾が，-στος（-τος）で終る動詞的形容詞を形成するものが，50%。それ以外が，28%。ちなみに，名詞15%，動詞4%である。この様に，否定接頭辞が非常によく動詞的形容詞を形成すると言う事は，否定詞が述部を否定すると言う傾向と関係し，又，否定接頭辞による動詞の矛盾辞項形成がほとんど見られないと言う事は，動詞の否定は，否定詞 δέ(ν)，μή(ν)が十分よくその役割を果してくれていると言う事の裏返しでもあろう。

以上の考察を試みたが，全ての問題を解明するには，ここで抽出した資料だけでは十分とは言い難く，さらに通時的にも共時的にもより幅広い資料の収集が必要となろう。諸方言に於ける語形成や，歴史的な単語の盛衰や音韻変化にも関連して考察してみれば，より興味ある結果が得られるであろう。